＜デジタル発＞続「ゼロコロナ」の中国へ　今も鉄壁の入国管理　２度目だから見えた「新しい景色」

2022 年 12 月 12 日北海道新聞

新型コロナウイルスを徹底的に封じ込める中国政府の「ゼロコロナ政策」。都市封鎖をはじめとした厳しい行動制限やＰＣＲ検査の義務化などに対し、住民の不満が爆発して抗議運動が全土に広がり、中国政府が大幅緩和策を発表するなど転換期を迎えています。政策の大きな柱の一つが、海外との往来を制限する「入国管理」です。私は北京に着任した７月と、台湾出張から北京に戻った１１月と半年間に２回、入国時に義務付けられている隔離生活を体験しました。この間の変化も含め、中国に足を踏み入れる際の実態を報告します。（北京・古田夏也）

白い防護服の人たちだらけ？　またも始まった隔離生活

■まるでガチャ？　運任せの隔離施設

１１月３０日。私は台湾統一地方選の取材を終え、台湾桃園国際空港から飛行機に乗り込む時、少し憂鬱（ゆううつ）になっていました。北京で８日間の隔離生活が待ち構えているためです。台湾で取材したのは７日間。中国本土を離れて戻ると、滞在期間にかかわらず８日間の隔離が義務付けられ、効率が悪いため出張や帰省をちゅうちょする大きな要因となっています。

どこの施設で隔離されるか、事前情報はありません。中国国内のＳＮＳ上で入国時の隔離は「盲盒（マンフー）」と呼ばれています。カプセル玩具の自動販売機「ガチャガチャ」を意味する言葉で、「中身が見えないガチャガチャと同じで、隔離施設には当たりとハズレがある」という皮肉が込められています。７月の北京着任時の隔離期間は１４日間で、私が搭乗した日本からの直行便の着陸地だった大連市の豪勢なホテルで過ごしました。今振り返れば、「当たり」だったように思います。さて今回はどうなるのでしょうか。

北京空港に向かう飛行機には、前回同様、白い防護服をまとった「大白（ダーバイ）」たちが待ち構えていました。見た目がディズニー映画「ベイマックス（大白）」に似ていることから名付けられ、中国に暮らす人たちにとってはもはやおなじみの存在で、ゼロコロナ政策の象徴といえます。

私たち乗客には機密性の高い「Ｎ９５マスク」が配布され、着用するよう求められました。北京空港に着くと指定のバスに乗せられ、交通渋滞もあって隔離施設に着いたのはもう夜。暗闇の中で表情の見えない大白が乗客を出迎えます。その姿は不気味で、乗客の女性は抱きかかえていた赤ちゃんを泣きやませるのに必死でした。北京は既に寒く、手元の

温度計は氷点下２度。消毒液を噴霧されてべたついたスーツケースを受け取り、いざ施設内に入ります。

■けんか勃発、不満ここにも

「あ、ハズレかも」。施設の外観を見たときからうすうす予感はしていましたが、指定された１６階の部屋に入って確信しました。大連のホテルとは全く異なる無機質な空間。スマートフォンの地図アプリで位置を確認すると、北京市南東部・通州区の大学の敷地内にいくつも施設が並んでいる中の「５号楼」でした。

部屋は、縦４メートル、横５メートルのリビングスペースに、洗面台とシャワー、トイレが一体となった部屋、ベッドが置かれた寝室と、机のある部屋が備えられていました。十分な広さは確保されていましたが、消毒液が至るところに吹き付けられ、ほこりっぽさも感じました。

私を含めて５号楼に隔離された１２０人超の連絡用に、スマホアプリでチャットグループが作られました。施設に入った直後から、そこには不満が飛び交っています。「こんな独房のような空間にいたらおかしくなる」「前の住民のものと思われる毛が落ちていた。本当に掃除しているのか」「加湿器をください。台北のホテルでは快適だったのに、ここはひどい」。

施設管理者は役割ごとに「政策班（全般）」「生活保障（食事など）」「医療班」に分かれ、各要望に返答していたのですが、一時は対応が追いつかないほどの書き込みの量に。「空調を直しにきてほしい」「いつになったら来てくれるんだ」「外を歩きたい」。隔離者の不満は絶えません。フラストレーションの高まりからか、その書き込みに対して別の隔離者から「その要望は余りにもわがままだ」「以前にも回答がある。何度も聞くな」と横やりが入り、画面上で言い争いに発展した例もありました。

強制的に自由を奪われて隔離されるため、不満が出るのも当然です。ただ、６月の大連で経験した隔離では、同じグループが２０人前後と少なかったこともあって、見られなかった現象です。

ちなみに隔離にかかる費用は、住居費が１日３８０元（約７６００円）、食事代が１日１００元（約２千円）で、８日間分は合計３８４０元（約７万６８００円）でした。これを入居の受付時にまとめて電子マネーで払う形となっていました。

■増える入国者、強まる監視

「ゼロコロナ」政策での出入国管理について、７月の北京着任時からの変化について少し説明します。１番の変化は、査証（ビザ）の要件を少しずつ緩和し始めたことです。７月からは、申請時に中国政府の発行する招聘（しょうへい）状が不要となりました。８月下旬には留学生向けのビザ発給も２年半ぶりに再開しました。

ビザ発給の条件はビジネスや家族帯同などに限定されていますが、外国人の受け入れを全面的に停止した２０２０年３月時点からはだいぶ緩和され、中国への渡航者が少しずつ増えています。

日本国内から中国へ向かう直行便をみると、新千歳など道内空港はまだ再開されていませんが、東京や大阪などは徐々に回復。在日中国大使館のＨＰによると、日中間の直行便数は、６月時点で週に計２２便でしたが、１１月時点では６０便に増えました。ちなみに感染拡大前は週３００便を超えていました。

７月には日本からの「北京直行便」が復活。北京は１０月に５年に１度の中国共産党大会が開かれたこともあり、最も厳格な「首都の防疫対策」が行われています。中国内の移動といえども「外から入ってくる人」については感染リスクを判定した上、徹底的に絞る対策です。日系企業関係者からは「北京に入る要件はとても厳しい」「他都市に出張に行っても、感染地域に足を運ぶと北京に戻れなくなる」といった声が相次いでいました。１１月１１日には、日系企業団体５７０社でつくる「中国日本商会」が北京市政府に対し、「移動規制が厳しすぎる」として改善の要望を出しました。

隔離施設が北京市中心部から遠く離れた郊外に設けられているのも、慎重な防疫対策をとっていることの表れといえます。

■隔離者をカメラで監視　警告も

隔離生活に話を戻します。食事は弁当で、朝は午前７～８時、昼は正午前後、夕方は午後５～６時ごろに、部屋のドアの前のベンチに置かれます。運び役の大白が食事を置いていく際にドアを１～２回ノックしていきます。食べ終わった弁当がらなどのごみは、ドア前のベンチに置きます。

食事を取る時、ごみを置く時にもＮ９５マスクの着用が義務づけられました。「誰とも接触しないはずなのに、なぜ？」とも思いましたが、廊下に設置された監視カメラで隔離者たちは常時チェックされていたのか、管理者が時々、グループチャットに「５号楼　１７０７（号室）　１８時４３分、食事を取る際、マスクなし」「警告一つ目」などと投稿します。

隔離者が勝手な行動を取らないよう、「見ているぞ！」とけん制をしているのでしょう。警告が重なったペナルティーで隔離期間を延長されかねず、しぶしぶ従うことにしました。

ほぼ毎朝、ＰＣＲ検査を行うため大白がドアの前に来ました。ノックの回数が食事を置く時より多いため判断ができます。８日も過ごしていると、だんだんと慣れてくるものです。

■「５＋３」の謎　社区に断られる

隔離はいったい何日間なのか。仕事を抱える人も多かったとみえ、グループチャット内で一番飛び交った疑問でした。そして、それを一層わかりにくくしているのがゼロコロナ政策で飛び交う「５＋３」といった表記です。これは、５日間の強制隔離と、３日間の自宅隔離を意味します。

初めて入国してまだ北京市内に住所のない人は、自動的に８日間の隔離となります。一方、北京に住宅のある人の強制隔離は５日間で、残り３日間は自宅で過ごすことができます。実際、隔離期間を通知する紙にも、５日間の人と、８日間の人の２段階で書かれてあります。

北京市内に自宅がある私は当然、３日間の自宅隔離を希望しましたが、ここに落とし穴がありました。自宅隔離に移るためには、自分が住む社区（地域）から、完全な防護服を着用した人によって、迎えに来てもらう必要がありました。私の住むマンションに申し出ましたが、「感染者の対応で忙しく、とても人手を割けない。うちのマンションはみな同じ対応を取っている」とあっさり断られました。自宅隔離の夢ははかなく消え、施設で８日間耐え続けることになりました。

ちなみに、同じ航空便で台北から帰ってきた別の報道機関の記者は、社区が協力的だったため「自宅の３日」が認められ、施設は５日間で出て行きました。ところが、自宅に戻ると玄関近くの廊下に監視カメラが取り付けられ、同居家族も含めて外出厳禁だったそうです。場所を変えたとしても、入国後の「８日間の隔離」はきっちりと管理されているようです。

そしてついに隔離最終日。８日間とはいえ、朝からそわそわが止まりません。同じタイミングで隔離が始まった人たちも同じ気持ちだったようで、この日のグループチャットには多くの投稿がありました。「いったい何時に迎えが来るのか」「１９時半の解放だったら、そろそろか？」「夕食は出るのか」「迎えの車はどこに呼んだら良いのか？」。私も早くから荷物をまとめ、室内なのにジャンパーを着て、ドアの前で待ち構えていました。解放時間の１０分前に、大白が迎えに来ました。

消毒液まみれのエレベーターで１階に降りて、外に出ると景色がすっかり変わって見えました。隔離中、北京のコロナ政策がめまぐるしく動いた時期でもあったので、今の北京の様子はどうなっているのかさっぱり想像がつかず、浦島太郎のような気分でした。手元の温度計は氷点下１度。寒さよりも、とにかく自由に大手を振って歩けることに喜びを覚えました。「人民にささやかな幸せを感じさせるのが、共産党の人心掌握術ですよ」という同業者のコメントに妙に納得しながら帰路に着きました。

■「ゼロコロナ」の行方は

中国政府は１２月に入り、ゼロコロナ政策の緩和を打ち出し始めました。北京市内では、かつて公共交通機関や公共施設に入る際にスマホアプリでのＰＣＲ検査の陰性証明が必要とされていましたが、原則不要となりました。一時は厳しく制限されていた店内飲食も徐々に再開しつつあります。

政府が「動態清零」（ダイナミック・ゼロコロナ）と呼ぶ、いわゆるゼロコロナ政策を始めたのは、デルタ株が流行し始めた２０２１年８月から。しかし最近の政府発表では「動態清零」の言葉がすっかり消えました。１１月下旬に全土に広がった住民のデモも影響しているのでしょう。緩和によって住民の不満を抑え、事実上の共存策「ウィズコロナ」へと移行することで経済の正常化を急いでいるようにも思えます。

いずれ観光ビザが再開され、出入国管理も大幅緩和される日が来るでしょう。中国で大規模な人口移動のタイミングは、毎年２月前後の中国圏の旧正月「春節」と、６～７月の卒業、入学、就職シーズンです。２０２３年は１月２１～２７日が春節の連休です。北京市の経済アナリストは「この２つのタイミングのどちらかでまずは国内移動を正常化させるのが先でしょう。海外旅行の解禁のタイミングは２０２３年６～７月か、さらにその先の２４年の春節になるのではないか」とみています。

中国で海外旅行が解禁され、日本からの観光目的での入国が許可されれば新型コロナで途絶えていた往来が少しずつ回復に向かうかもしれません。感染拡大前の２０１９年には中国から９５９万人が日本を訪れ、訪日客全体の３割を占めていました。先行きはまだ見通せませんが、入国管理に伴う不自由な隔離生活が完全になくなることを願い、今後も中国のコロナ政策の行方について、注目していきたいと思います。